

市民マラソンを通じた地域・産業振興

～東京マラソンの概要と全国各地の事例～

経済社会政策グループ 第一部

研究員 丸山 智由

近年、高齢社会が加速している我が国において、健康に対する意識を持つ人々が多くなってきている。その中で、健康の一環として、ジョギング・マラソンは、老若男女を問わず、気軽に行えることもあり、行動者の数は1,000万人を超えている。

それに伴い、市民マラソンの大会が全国各地で行われており、観光客の誘致や、地域の特産品のPRに大いに貢献した事例が見られている。さらに、来年2月には、3万人が都心を走る国内最大規模の市民マラソンとなる東京マラソンの開催も予定されており、市民マラソンが大いに注目されている。

ここでは、東京マラソンの概要とともに、市民マラソンを通じた地域・産業振興の事例を紹介する。

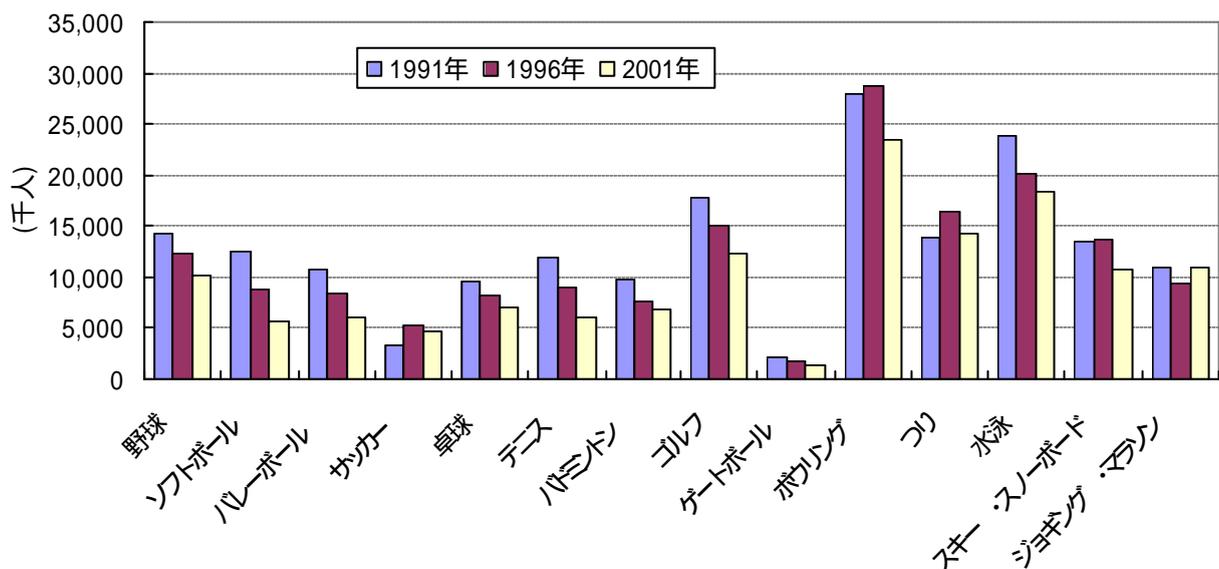
高水準のマラソン人口

総務省『平成13年社会生活基本調査』において、過去1年に何らかの「スポーツ」を行った人は8,162万7千人で、10歳以上人口に占める割合(行動者率)は72.2%となっている。スポーツ別では、ボウリングが最も多く2,607万人、次いで水泳が2,236万人となっており、ジョギング・マラソンは、1,332万8千人で5番目である。

図表1は、1991年、1996年、2001年の15歳以上の各スポーツの行動者数であるが、ボウリング・水泳が1996年より減少している一方で、ジョギングマラソンは前回よりも増加している。

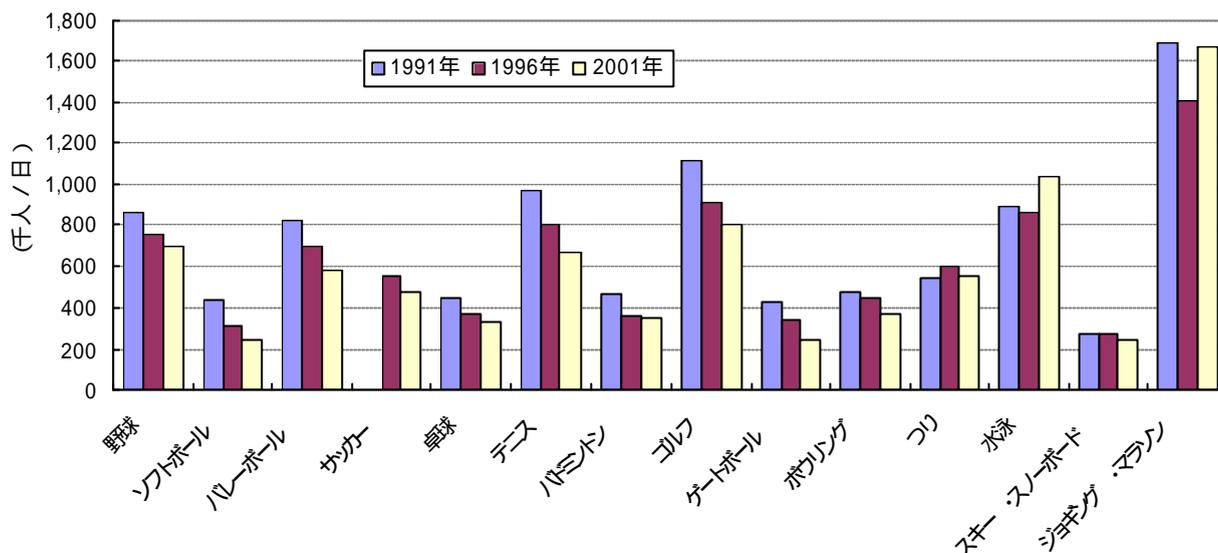
同調査で平均行動日数をみると、ゲートボール(60.6日)に次いで、ジョギングマラソンが58.0日と多く、1日あたりの行動者数で算出すると、ジョギング・マラソンが167万人で、他のスポーツよりも際だって多いことがうかがえる(図表2)。

図表1 各スポーツの行動者数(各1年間に行動した経験があるスポーツ(15歳以上))



野球はキャッチボールを含む、ゴルフは練習場を含む
資料：総務省『平成13年社会生活基本調査』

図表2 各スポーツの1日あたりの行動者数(15歳以上)



資料：総務省『平成13年社会生活基本調査』の結果より年間行動者数 / (年間行動日数 / 365日) を算出

図表3 一般的なランニングイベントの収支構造(条件：参加者5000名)

収入		支出	
主催者事業予算	500万円	記録システム費 (データ入力・計測費・人件費など)	368万円
大会参加料収入	1,000万円	大会運営費 (会場設営・給水・マニュアル制作など)	275万円
企業協賛金	300万円	選手費 (参加賞・記録賞など)	260万円
前夜祭入場料(200名参加)	100万円	広報費 (雑誌広告・パンフレット作成など)	225万円
		前夜祭費 (食費・会場費など)	220万円
		人件費 (ガードマン・運営スタッフなど)	132万円
		大会役員費 (スタッフ・ジャンパー食費等)	42万円
		安全対策費 (医師・コース上の看板など)	38万円
		式典費 (表彰状・トロフィー制作など)	32万円
		消費税	81万円
		大会運営会社 進行手数料 上記の10%	159万円
		事前準備 事務局運営費	68万円
合計	1,900万円	合計	1,900万円

出所：ランナース(2005)『イベントニュース vol.8』

市民マラソンの大会運営

1,000万人を超えるマラソン人口の獲得のため、全国自治体で市民マラソンが行われているが、限られた自治体の予算の範囲内での運営体制について詳述していく。

2005年4月に実施された長野マラソンは、5,000人以上が参加するフルマラソンの大会であるが、警察官168人、警備員407人、ボランティア2,350人、交通安全協会161人、陸協関係者387人が動員されて大会運営にあっている。

給水所では、水32,408リットル、スポーツドリンク13,475リットル、給水紙コップ170,200個、スポンジ

8,000個、バナナ10,000本が用意された。参加者が多くなると運営スタッフもかなりの人員が必要となる。このため、長野マラソンではボランティアに担うところが大きく、地域全体で大会を盛り上げるためにも、その確保が重要となる。

マラソンのイベントの企画・運営する株式会社ランナースによると、ハーフマラソン・5km等の種目で、参加者5,000人(一般4,000人、小中学生1,000人)規模の標準的な市民マラソンの大会での収支構造は、上記図表3の通りである。

収入面では、参加料収入と企業協賛金が収益の柱で1,300万円で、自治体等が負担する額は500万円程度のものである。一方、支出面では、記録システム、大会運営、選手参加賞などが支出の中心である。

この他に、地域にもたらされる経済効果となると、宿泊・滞在費等の観光収入の他、大会会場の設営、大会スタッフへの飲食物、選手サービスとしての給水やエイドステーションの設置、参加賞の制作、スタッフウェアの制作等があげられる。さらに、雑誌や新聞記事に掲載されることによる宣伝効果も大きなものである。株式会社ランナーズの調べによると、北軽井沢マラソンでは、主催者の負担 200 万円で、経済効果 1,963 万円、サロマ湖 100km ウルトマラソンでは主催者負担 1,500 万円で、経済効果 7,270 万円あったと算出されている。

東京マラソンの開催

今まで、我が国において、最大規模の市民マラソンは約 2 万人が走る 12 月の NAHA マラソンであったが、2007 年 2 月には、その数を大幅に上回る 3 万人規模の市民マラソンが東京で行われることが決定している。

この東京マラソンは、石原東京都知事を中心に、ニューヨークのように大都市での市民マラソンを行うことで、世界に向けて観光都市東京をアピールし、国内外から旅行者を誘致するなど大きな経済波及効果の実現を目指すことと、都民がボランティア等、様々な形で大会に参加することで、地域活性化を図ることを目的として開催される。

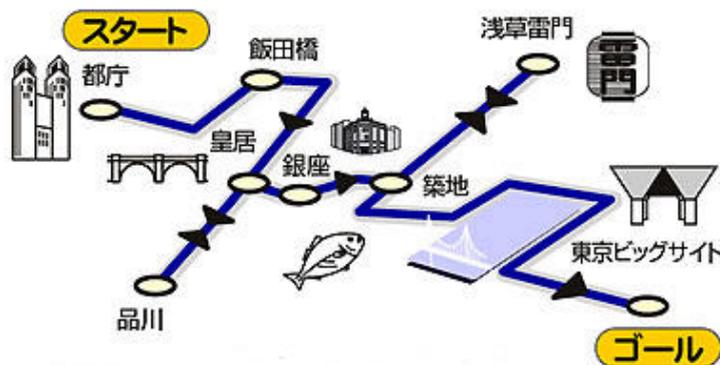
具体的には、トップランナーを含む男女 3 万人が参加する大会で、フルマラソン(定員 25,000 人)と 10km ロードレース(定員 5,000 人)が行われる。コースは、都庁をスタートし、皇居前、銀座、浅草、築地などを主な通過ポイントとし、臨海副都心がゴールとなる。都内観光名所を巡り、かつ記録を狙える魅力あるコースの設定となっている。制限時間は 7 時間で、応募者多数の場合は抽選となる。

初めて開催する大会では、運営において入念な準備が必要となってくる。特に大都市東京で、スタートとゴールが異なるコースで行う今回の大会は、都心の広範囲の道路が長時間通行止めになり、都市の生活網・流通網が遮断されることになり、それに対する反発も予想される。特に、現状において、都市部で行われるマラソンの大会ではフルマラソンの制限時間は 5 時間が最高であり、今回の制限時間 7 時間は異例である。幹線道路を長時間通行止めにした市民マラソンにおいては、ドライバーの反発が大きくトラブルが生じるケースもある。しかし、完全に道路を通行止めにしなないと、3 万人のランナーの安

全が確保されない。双方の負の影響を最小限に食い止めるには、交通規制のあり方だけでなく、ドライバー等がこの大会に対する理解を深めることも重要となってくる。

また、大会運営上、3 万人のランナーに対する給水・給食体制の整備とトイレの確保、けが人・病人の搬送体制の整備は命に係わる問題でありとても重要である。3 万人が参加する大会を支える運営管理体制には、入念な計画と数万人規模の運営スタッフ(ボランティア)の確保が必要である。

図表 4 東京マラソンの予定コース



出所：東京都ホームページ

地域・産業振興を狙った市民マラソンの事例

東京マラソンと規模は異なるが、各地域の自治体は、運営の課題を解決して、地域・産業振興に成功した市民マラソンの大会がある。ここでは、いくつかその事例を紹介する。

1) 富里スイカロードレース

富里市は、千葉県の北総台地のほぼ中央に位置しており、成田空港から西に約 4km に位置している。すいかが名産で、PR を兼ねて約 20 年前より実施されている。毎年 6 月の第 4 日曜日に開催されるこの大会は、10km、5km 等の種目があり、名物はゴールの 1.5km 手前の「給水所」ならぬ「給すいか所」で、すいかが食べ放題となっている。走りながらすいかが食べられることを目当てに日本全国から 1 万人のランナーがこの大会に集結している。さらに大会会場では、すいかの試食・販売が行われており賑わいを見せている。すいかは JA 富里市からの 2500 個以上提供されている。

2) 別海町パイロットマラソン

別海町は、北海道の東、根室半島と知床半島の間に位置し「酪農」「水産」「観光」の町である。酪農は、広大な面積に恵まれ、乳牛 11 万頭を数え、大型酪農地帯を形成し生乳生産量日本一を誇っている。水産では、オホーツク海産の鮭、北海シマエビ、ホタテ等が有名である。

この町は、スポーツ施設も充実しており、夏場の陸上部の合宿のメッカとなっているが、10月に開かれるパイロットマラソンは、日本の将来を先導して走るという名前の由来のもと、27回の歴史を数える。種目は、フルマラソン(42.195km)と10kmがあり、フルマラソンに完走すると新巻鮭一匹がもらえる大会として有名である。この大会は、釧路空港から会場まで約2時間の距離を無料送迎しているサービスの他、町の第3セクター(株)べつかい乳業興社(平成14年4月設立)よりバター、アイスクリーム、牛乳の無料サービスなどがあり、町の特産品のアピールを行っている。参加者は一時期停滞して300名を割り込んだ時期もあり開催が危ぶまれた時期もあったが、制限時間を4時間30分から5時間20分に延長したことなどで参加者が増加し、平成17年の大会では、九州からの参加を含めフルマラソンに500名が出場している(筆者もその一人である)。各特産品は、カタログでの

販売も行っており、大会出場者が、レース参加後、購入するケースもよく見られる。

3) 小川和紙マラソン

伝統産業の和紙・絹・建具などで有名な埼玉県小川町では、毎年12月に小川和紙マラソンを開催している。マラソンを通じて、健康の保持増進と体力の向上を図るとともに、小川町を全国にPRすることにより、町の活性化を図ることを目的に平成5年より開催している。ハーフマラソン(21.0975km)、10km、5km、3km、2kmの種目があり、日本全国から4,000名余りが参加している。この大会は、特製和紙台紙が配られ、ゴール時の写真と記録が掲載された完走記録証を貼ることができ、小川和紙のPRに一役買っている。大会規模は維持しつつボランティアの活用により、事業費は年々抑制しながら効率的な運営を行っている。

この他にも、地元産業のPR・地域振興に貢献しているマラソンは数々存在しており、主な大会は図表5に整理している。今後も、各地方自治体にとって、市民マラソンの開催による地域・産業振興が期待される。

図表5 地元の産業PRを図っている主な市民マラソン

特産品	時期	場所	種目	概要	前回参加者
別海町パイロットマラソン	10月	北海道・別海町	フル他	完走すると鮭一匹、参加賞に乳製品が贈られる。	794人
雄物川まつたけマラソン大会	10月	秋田・横手市	20km他	参加賞に松茸ごはん、Tシャツ、特産品、各種目6位までに松茸が配られる。	737人
果樹王国ひがしねさくらんぼマラソン大会	6月	山形・東根市	ハーフ他	参加賞にさくらんぼの他、さくらんぼ種飛ばし大会も行われる。	3,738人
加須こいのぼりマラソン大会	12月	埼玉・加須市	ハーフ他	全長100mを誇るジャンボこいのぼりの遊泳と本格的な手打ちうどんが有名、参加賞はこいのぼり絵入りタオル、手打ちうどんのサービスがある。	3,574人
小川和紙マラソン	12月	埼玉・小川町	ハーフ他	埼玉伝統工芸会館を発着するコースで、小川和紙等の伝統工芸品をアピールしている。参加賞に和紙製品	4,540人
鴻巣パンジーマラソン	3月	埼玉・鴻巣市	ハーフ他	参加賞は花の種(パンジー、コスモス、ひまわりの種)入賞するとパンジー等のお花が贈られる。	2,192人
庄和太夫マラソン	5月	埼玉・春日部市	ハーフ他	大会日前後には日本一の大風あげ祭りを開催、上位入賞者には風が贈られる。	4,226人
富里スイカロードレース	6月	千葉・富里市	10km他	給スイカ所があり、走りながらスイカを食べられる。	11,935人
勝沼ぶどう郷マラソン	11月	山梨・甲州市	20km他	参加賞にぶどう、ワイン、お弁当で、会場でワインの飲み放題が楽しめる。	3,720人
ぶどうの里ふれあいマラソン	9月	岡山・井原市	20km他	西日本有数のぶどうの産地、完走したあとにはぶどうの食べ放題・おにぎりでもてなし。地元の各種団体・ボランティアによる手作りの大会	865人
北栄町すいか・ながいも健康マラソン	7月	鳥取・北栄町	10km他	ゴール後は大栄スイカが食べ放題・長いものとり汁がサービス。	3,908人
小豆島オリーブマラソン全国大会	5月	香川・内海町	ハーフ他	オリーブをはじめ地元特産品が参加賞となっており、会場ではソーメンの食べ放題のサービス。	4,389人
あくね ボンタンロードレース大会	12月	鹿児島・阿久根市	ハーフ他	阿久根市はボンタンが日本一の生産量、参加賞はボンタンをはじめ阿久根市の特産品(ボンタン、丸干、竹の子、ボンタン漬)	2,355人

資料：<http://www.runnet.jp/>、<http://www.sportsentry.ne.jp/> より価値総合研究所が作成